

# 紫式部の女性観

—「帚木（雨夜の品定め）」による—

尾崎 誠子

## 目次

はじめに

第一章 好ましく描かれた女性

第二章 好ましく描かれなかった女性

一、「とりなせばあだめく」女

二、美相なき家刀自

三、賢き女

四、子めきてやはらかならむ人

五、そばそばしく心づきなき人

六、「はひ隠れぬ」る女

七、「気色ばみ背かん」女

八、「頼もしげなき疑ひあらん」女

第三章 「雨夜の品定め」における紫式部の女性観

一、妻としての最低条件

二、階級的な女性観

三、理想の妻とは

四、妻のとるべき態度

五、まとめ

おわりに

はじめに

ありし雨夜の品定めの中の、いぶかしくおもほしなる品々のあるに、いとゞ、隈なくなりぬる御心なめりかし。

「夕顔」の巻で、このようにはつきりと作者自身によって「雨夜の品定め」と呼ばれている「帚木」の巻の前半部分は、妻としてどのような女性が理想であるかという作者の抱懐する女性観を、座談会形式により、作中人物の口を借りて論評したものである。

紫式部が『源氏物語』を執筆したのは、西暦一〇〇〇年頃のことであり、今から九八〇年近く前に生きた彼女が、どのような女性観、人間観を持っていたかということは、大変興味深いことである。そして、その女性観が果たして現代においても通用するか、否か。それもまた実に興味深いことであろう。

卒業論文を書くに当たって、わたくしは是非この問題について取り組んでみたいと思った。平安時代という最も華麗な時代に生き、後宮という最高の勤務先を持った彼女の考えた同性の理想像とは、果たしてどのようなものだったのか。

論法としては、ヘーゲルやマルクスが哲学を論じた「弁証法」に

似たものを用いてみようと思う。まず、「正」にはこの品定めに現われた女性のうちで、作者が好ましく思って描いたと思われるものをあげる。「反」には好ましくなく思って描いたと思われるものをあげる。そして「合」で両者を総合して、彼女の女性観をみたいと思う。

なお、本文に引用する原文は、すべて岩波文庫『源氏物語(一)』(山岸徳平校注)により、( )内はそのページを示す。

## 第一章 好ましく描かれた女性

この品定めには、全体を通して十二の異なる女性が描かれているが、そのほとんどが、

大方の世につけて見るには、咎なきも、「わが物」と、うち頼むべきを選ばむにおほかる中にも、えなん思ひ定むまじかりける。(「帚木」四八ページ)

とあるように、一般的にひとりの女としてみれば、格別欠点はないが、いざ自分の生涯の妻にと決定するにはなかなかむずかしい。それを国家の政務に携わる男性の場合と比べて述べているが、その中でわずかに一例、

ひとへに、うち頼みたらん方は、さばかりにてありぬべくなく、思ひ給へ出でらる。(同、五九ページ)

と、妻として合格点らしきものをもらった女性がある。

それは、この品定めに「物定めの博士」として登場する左馬の頭が、「下臈に侍りし時」に出会った女人である。

その女人は、容貌など外見は特にすまわなかったが、「もとより思ひ至らざりけること」でも「無き手をいだし」、「おくれたる筋の心」も「思ひはげ」んで、夫の機げんをそこねないようにと心掛けてくれている女性である。しかも、ちょっとした風流ごとでも、生活上の大切な用件でも、「いひ合はせたるに、かひなからず」、染色・裁縫の腕も大変すまわっていたのである。しかし、人並みはずれた焼きもちやきだったので、「しばし、こらさむ」の心づもりの夫の大げさな言いおどしから縁も切れ、女は後に死んでしまう。女の死後、「さばかりにてありぬべくんなん」と思うのだが、それは後の祭りであった。

つまり、嫉妬するという欠点を除けば、まず申し分のない女性で、その嫉妬も、夫を思う余りのことであって、万事において「心も、けしうはあらず侍りし」純粋な女性こそ、いちずに妻として頼るに好ましい女性であるというのである。

## 第二章 好ましく描かれなかった女性

### 一、「とりなせばあだめく」女

「これを、はじめの難とすべし」と、最初から問題にされないのは、

「なよびかに、女し」と見れば、あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。(同、四九ページ)

ような女である。えてしてそのような女性は、「かたちきたなげな

く、若やかなる程」で、男に心もとなく思わせ、やきもきと男を待たせ、ことばは少ないので、「いとよく、もて隠す」ものである。

結局、「物のあはれ知りすぐ」才情派の気取りやや、お嬢さん型の女は、見ばえがよいだけで、一家の主婦としては、家事の切り回しという最も大切な方面のことに欠けて頼りにならない。妻として全く安心できない女である。外見よりも中身が問題だというのである。

## 二、美相なき家刀自

それかと言って、一とは対照的な性格の世話女房型の女、「まめくしき筋をたてて、耳はさみがちに、美相なき家刀自」もまた困りものである。夫の世話に一生懸命で、自分の身だしなみも気にしないでまめまめしく立ち働けけれども、夫の心中を察することはしない。夫は、いろいろと気のついたことを話し合いたいと思っても話し合いがなく、張り合いもなくなってしまう。

こういうふうな情趣も解さず、相談相手にもならない、無教養で実事専念の女性は、家政婦ならいざしらず、妻としては失格者とされている。

## 三、賢き女

藤式部の丞が「まだ、文章の生に侍りし時」に出会った「賢き女」

は、

公ことを言ひ合はせ、私さまの、世に住まふべき心おきてを、思ひめぐらさむ方も、いたり深く、才のきは、なま／＼の博士はづかしく、すべて、口あかすべくなん、侍らざりし。

(同、六六ページ)

というふうで、もちろん「軽／＼しき物怨じ」などはせず、男に腰折文を作ることなども教えたりするほど賢明であった。しかし、男は「その者を師として」は思えても、「なつかしき妻子とうち頼むには、いつか醜態を演ずるであらう恐れから「恥づかしくなん、みえ侍りし」というのだ。

偉すぎて、優しい潤いの欠けたコチコチ頭の女性というのは、とても妻にはしがたい。そればかりか、この品定めにかげられたどの女性よりも手きびしい批評を受けている。

君達、「あさまし」と、思ひて、「そらごと」とて、わらひ給ふ。「いづこの。さる女かあるべき」「おいらかに、鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけきこと」と、爪弾きをして、「言はむ方なし」と、式部をあはめ憎みて、「少しよろしからむ事を申せ」と、責め給へど、「これより珍しき事は、さぶらひなんや」とて居り。(同、六九ページ)

聞き手たちだけでなく、話し手の本人自身が「これ以上のおもしろい話はない」と断言して澄ましこんでいる。また、この女を説明する会話文にも、どことなくこの女を軽くみているような口調が感じられる。これらのことから、紫式部は、この種の女性に対してかなりの嫌悪を感じていると思われる。それは、そのすぐ後にも、女の

手紙に用いる漢字の割合のことや、はた迷惑な女流歌人のことを、この「賢き女」の例に添えて批判している点からもわかる。

無教養な女性もだめだが、賢女も好ましくない。適当に賢くて、どこか抜けているような女性が望ましいとしているのか。

#### 四、子めきてやはらかならむ人

「たゞ、ひたぶるに、子めきて、やはらかならむ人」を妻にしたらどうだろうか。少し頼りなくても、「直し所」があり、自分の理想通りに育てあげることができるので、先が楽しみではないだろうか。

「さし向ひて」過ごすのには、かわいらしさに免じて暮らせるかもしれないが、しかし、「たち離れて」暮らすには、「深きいたり」がなく、ひとりでは何もできないので困る。夫婦という一对の相手として、この世を共に生きていこうと思うとき、「頼もしげなき咎」は、かわいらしさを上回る決定的な欠点となる。

『源氏物語』には数多くの女性が登場するが、そのうちで理想的に描かれているのは、光源氏の義母藤壺と、その姪で後に光源氏の心の妻になる紫の上である。紫の上の場合は、「若紫」の巻で語られているように、まだ幼い紫の上を源氏が引き取って育て、理想の妻に仕立てあげる。これは、ここにあげた「ただ、ひたぶるに、子めきて、やはらかならむ人」を、とかくひきつくるひては、などか見ざらん」と類似した点はあるが、源氏によって養育された紫の上は、まさにこの上なき人であった。やはり、血筋が高貴の出身であ

るためか、それとも、育てた光源氏がすばらしかったからであろうか。

紫式部個人としては、この種の女性に、最も強く心を引かれていたのではなからうかと、わたくしは思う。それは、

やうだいいとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなごも、わが心とは思ひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あまり見ぐるしきまで見ぬい給へり。(六二ページ)

と、『紫式部日記』(岩波文庫)に記されている小少将の君に対して、彼女は異常な親愛の態度を示しているからである。しかし、この小少将の君をモデルとして書いたらしい夕顔が、極端な不幸を負ってはかなく死んだということは、「好きだけれども、やはり」という気持ちがあったとわたくしは推測して、この第二章に入れたのである。

#### 五、そばそばしく心づきなき人

四とは反対に、

常は、少し、そば／＼しく、心づきなき人の、折節につけて、出で映えするやうも、ありかし。(同、五〇ページ)

という女性。もちろん、その「そば／＼しい人を肯定している訳ではない。「ありかし」ということばがその証拠で、この一文の余韻には、「だけど、やはりそんな女は好ましくない」という否定の心情が隠されているのである。

## 六、「はひ隠れぬ」る女

艶に物恥して、うらみ言ふべきことをも、見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをつくり、心一つに思ひあまる時は、いはん方なくすこぎ言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどに、はひ隠れぬかし。(同、五一ページ)

このような思わせぶりの女の家出は、「いと、軽／＼しく、殊更びたる事なり」と、痛烈に非難している。尼になっても俗世が忘れられず、「なまうかび」だし、尼になる前に連れもどされても、以前のように男女の仲がうまくいくものでもない。「あしくもよくも、相添ひて、とあらん折も、かゝらんきさみをも、見過ぐしたらん中」であつてこそ、夫婦仲はうまくいくのである。

これは、当時すでに成立していた藤原道綱の母の『蜻蛉日記』を念頭において書いたことはいまでもない。室伏信助氏は、『結局こういう女の生き方は、一面ひとの心をゆさぶる真実味を蔵しながらも、終局的には認めることのできないものとして提示されている。』(『源氏物語講座』第五卷・三一ページ)と述べられている。に、わたくしは同感する。紫式部も、「いと、あはれに悲しく、心深き事かな」とは思ひながら、自分は絶対に同じ道はたどれない、たどらないという必死の覚悟から、「いと、軽／＼しく、殊更びたる事なり」という強いことばとなっているのだと思う。

この種の女と、前の四で述べた子供っぽい女とを混ぜ合わせたよ

うな女性が、頭の中將によって語られた常夏と呼ばれる女で、のちに源氏が通うようになった夕顔なのである。この常夏に対する頭の中將の回想は、

これなん、えたもつまじく、頼もしげなき方なりける。(同、六五ページ)

とある。夫を楽しくはさせるだろうけれど、けっして進歩はさせないような女で、これこそ生涯の伴侶とするには、最も困る種類の一例である。

## 七、「気色ばみ背かん」女

「なのめに移ろふかたあらん人を恨みて、気色ばみ背かん」(同、五二ページ)女はどうかというと、「をこがましかりなむ」と、はっきり否定する。夫に浮気心が生じたときに嫉妬するのは、一夫多妻・妻だけ婚制度の当時の女性には、免れがたい夫への抵抗であつた。しかし、それもほどほどにすべきだといふのである。

その典型的な例が、第一章にとりあげた指喰いの女であらう。

## 八、「頼もしげなき疑ひあらん」女

もし「心に入らん人」に「頼もしげなき疑ひ」があつたとしたら、それこそ大変である。一夫多妻制の当時において、妻が浮気をしていることが夫の耳にはいったら最後、もう相手にされなくなる。女として、浮気は絶対に許されるべき事ではない。

この例としては、左馬の頭によって語られた木枯しの女がある。「人もたちまさ」って、字や琴や詠歌などすべての芸道に達者で、「見る目」もすぐれていた。しかし、「少しまばゆく、艶に好ましき事」は、こっそり会うにはよいけれど、「しば／＼、まかり馴るゝ」には気にいらなかった。そこで、しばらく行かないでいると、「しのびて心かはせる人」ができたらしいというのである。「多情」は妻として最も排撃拒否される要因で、その性質をもっていた女性であった。

この種の女は、一で「はじめの難」とされたあだめく女と共通する点が多く、結局「すぎたわめらん女に、心おかせ給へ」といつている。この忠告の一語こそ、現代の「注意一秒、けが一生」という標語と同じような大きな意味がもりこまれていると、わたくしはみた。

### 第三章 「雨夜の品定め」における紫式部の女性観

#### 一、妻としての最低条件

ここまで「雨夜の品定め」に現われた女性の諸相について整理してみたとき、「頼む」ということばの類が、かなり頻繁にでてくることに気づいた。では、それらの「頼む」は、どのような部分に、どのような意味をもって用いられたのであろうか。「頼む」は、元來他動詞四段活用で、下二段に活用するときは、使役の意に用いられる。

次に、女を頼りにする「頼む」の類のことばを、本文の中からあげてみる。

#### (一) 他動詞四段活用「頼む」

○大方の世につけて見るには、咎なきも、「わが物」と、うち頼むべきを選ばむに、おほかる中にも、えなん思ひ定むまじかりける。(同、四八ページ)

○まして、人の心の、時にあたりて気色ばめらん、見る目の情をば、え頼むまじく思う給へて侍る。(同、五四ページ)

○ひとへに、うち頼みたらん方は、さばかりにてありぬべくなん、思ひ給へ出でらる。(同、五九ページ)

○しば／＼、まかり馴るゝには、少しまばゆく、艶に好ましき事は、目につかぬ所あるに、うち頼むべくは見えず、かれ／＼にのみ見せ侍る程に、しのびて心かはせる人ぞ、ありけらし。(同、六〇ページ)

○今に、その恩忘れ侍らねど、なつかしき妻子とうち頼まむに、無才の人、なまわろならん振舞など、みえんに、恥づかしくなん、みえ侍りし。(同、六七ページ)

まず最初に気付くのは、すべて「頼む」の前に「うち」という接頭語がつけられていることである。接頭語は、動詞の前につけてその意味を強める働きがある。とすると考えられることは、紫式部は「頼む」をかなり強調して用いたということである。

他動詞「頼む」にはたたくさんの意味があるが、ここでは「生活をまかせる」ことを意図していると思う。

#### (二) 形容詞「頼もしげなし」

○わが心と思ひ得ることなく、深きいたりなからむは、いと口惜しく、頼もしげなき咎や、猶、苦しからむ。(同、五〇ページ)

○さしあたりて、をかしともあはれとも、心に入らん人の、頼もしげなき疑ひあらんこそ、大事なるべけれ。(同、五三ページ)

○とき／＼にても、さる所にて、「忘れぬよすが」と、思ひ給へんには、「頼もしげなく、さしすぐいたり」と、心おかれ、その夜のことにとつてこそ、まかり絶えにしか。

(同、六二ページ)

○若き時の心にだに、猶、さやうに、もて出でたる事は、いと、あやしく、頼もしげなく、おぼえ侍りき。(同、六二ページ)

○これなん、えたもつまじく、頼もしげなき方なりける。

(同、六五ページ)

形容詞「頼もしげなし」は、二つの意味で用いられている。一つは、「生活をまかせる」には心細く、頼りにならないの意。もう一つは、男としてあぶなっかしくて見ていられない、信用できない、つまり、浮気という意で用いられている。

(三) その他

○たゞ、ひとへに物まめやかに、静かなる心の趣ならんよるべをぞ、終の頼み所には、思ひおくべかりける。(同、五〇ページ)

名詞「頼み所」は、頼りに思う所・頼みとする人のことで、夫か

らみれば「生活をまかせる」本妻のことを意味する。

そして、これらの語のほとんどが、具体例としてあげられた女を妻として否定するときの文章中、または、この品定めのもとめの部分とみられるところに使われている。「狭き家のうちの主とすべき、人ひとりと思ひめぐらすに、足らばで悪しかるべき大事どもなん、かたがた多かる。」(同、四八ページ)という一文もあることからして、作者の妻選びの最低条件は、男性が、「頼れる女性」ではないかと考える。

また、本文中に「頼みとする妻」の意として用いられた「よるべ」という語が三回、「よすが」が二回使つてある。これらのことから、妻というものは、ただかわいいただけではだめで、頼りにされなくてはだめだという、教養ある作者らしい考えが、その経験を通してあらわれていると思う。

## 二、階級的女性観

今度は、紫式部の階級による女性観を考えてみよう。

この品定めでは、保護者の社会的地位を上・中・下の三階級に分けて論じている。まず、上流階級の女性というのは、

人の品、高く生まれぬれば、人に、もてかしづかれて、かくるゝ事も多く、自然に、そのけはひ、こよなかるべし。(同、四五ページ)

とあるように、周囲のひとびとに大事にされ、万事が実質以上にカモフラージュされるために、おのずから欠点も隠されることが多く

て、人柄も心ばえも、その感じは立派に見えるものだ。そのような高貴な階級の女性が、実際家柄相応に立派に育つのも「ことわり」であって、もし、これという美点がないのは、いうまでもなく「いふかひなくおぼゆ」といつている。

また反対に、

下のきざみといふ際になれば、殊に耳たたずかし。(同、四五ページ)

貴公子にとって、下層の女性は縁遠く、格別注意もひかれないう語っているのも当然のことである。

そこで問題は中流階級の女性である。しかし、その中流階級の実態も多様であって、「なりのぼれども、もとより、さるべき筋ならぬ」者・「もとは、やんごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世移ろひて、おぼえ衰へぬ」る者・「受領」の中の「けしうはあらぬ」者・「非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬ」者などが含まれる。つまり、中流階級というのは、上層や下層とは違って、長所と短所が混合している階層をいつている。

中の品になん、人の心く、おのがじしの立てたる趣も見えて、分かるべきこと、かたゞ多かるべき。(同、四五ページ)

こういう家柄の娘の中にこそ、むき出しのまま批判にさらされ、個性教養がはつきりとよく見える女が多くておもしろい。また、律の門などに「思ひの外にらうたげならん人」の存在するのもこの階級である。紫式部自身も、越前守藤原為時の娘であり、中流階級の女性であることから、いささかの欲目があるかもしれないが、当時の

社会状況からいって、彼女のこの考えは正しいのではないかと思う。温室育ちよりも、風や嵐にもまれた者の方が魅力があったにちがいないと推察する。

では、作者のこの女性観が九八〇年経過した現在に通用するかということになると、いささか疑問を感じる。わたくしは、上流階級というものを知らないし、自分がどの品にはいるかもわからない。明治維新以後、四民平等になって身分差のない現在には、階級による女性観はなりたない誤である。彼女の生きていた貴族社会にこそ成り立つ見解である。

### 三、理想の妻とは

話をもともどもそう。

一においてわたくしは、作者の妻選びの最低条件は、男性が「頼れる女性」ということであると説いた。では、理想の妻とはどのような女性をいつているのであろうか。

第一章、第二章で、この品定めに現われた女性のうちで、作者が好ましく思つて描いたと思われるものと、そうでない者とに一応分けてみたが、そのいづれにも皆、一長一短があるので、

この、さまざまのよき限りを取り具し、難すべきくさはひませぬ人は、いづくにかはあらん。(同、六六ページ)

と、男性は嘆いている。また、作者は、

「はかなく、口惜し」と、かつ見つゝも、たゞ、わが心につき、宿世のひくかた侍るめれば。男しもなん、子細なき者は、



待るめる。(同、六七ページ)

と、男性について述べている。それに、

「女の、これはしもと、難つくまじきは、難くもあるかな」と、やう／＼なん、見給へ知る。(同、四三ページ)

欠点のない完全な女性はいないという意見が、この品定めめの冒頭に、一般的現状として述べられていることから、欠点のない女性が必ず理想の妻となる、とは言っていないようである。そこには、作者の深い自省心があらわれていると思う。

古来、幾多の先輩諸氏がこの品定めめの結論は次の所であると指摘されている。

今は、たゞ、品にもよらじ、かたちをば、更にもいはじ。いと口惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくは、たゞ、ひとへに物まめやかに、静かなる心の趣ならんよるべをぞ、終の頼み所には、思ひおくべかりける。(同、五〇ページ)

階級とか、容貌とか、外形的なものは、その人間の価値を不動にするものではない。やはり性格や人間性が大きくものを言う。夫に対する忠実さと人間的な愛、それさえあればもう十分である。それ以上に加えているとしたら、幸いと思ひ、いつも家のことが気になつて心が落ち着かないというようなことがなければ、少々欠点があつても、目をつぶらう。

この部分について、竹村義一氏は『源氏物語女性像』で、「ここには人生に対する作者の謙虚と深い愛情からくる、人間への肯定的態度、人間性尊重、現実主義のひらめきがある。」(一七〇ページ)と論じられている。人の生活の表も裏も見てきた紫式部らしい考え

方で、わたくしも、確かにそこがこの品定めめの最も言わんとする所だと思つた。一年生のとき、倫理学で「人間は元来イデアの世界に住んでいて、二組が一对になつて完全な球の形で生きてゐる。それが成長するにつれて強力な力を持つので、神が半分を割り、一方が男性、他方が女性になった。そして今、昔を想ひ起こして、完全な球の本当に美しいものを恋したつてゐる。」というようなことを學んだ。男女の仲もこれと同じことだと思ふ。ちようど円を二分したものでなくとも、もちつもたれつ、二つ合わせて完全な円になる、それが大切なことである。それでこそ、円満な家庭が生まれるのではないだらうか。

そして、正半円でなくても、少し欠けていても、少々大きすぎてもよい。一方の女性が「頼れる女性」であり、「物まめやかに、静かなる心の趣」のある女性であつたらよいのではなからうかと思つたのである。

#### 四、妻のとるべき態度

結婚した女性は、夫に対してどのような態度をとればよいのだらうか。

すべて、よろづのこと、なだらかに、怨ずべき事をば、見知れるさまにほのめかし、恨むべからんふしをも、憎からずかすめなさは、それにつけて、あはれも勝りぬべし。(同、五二ページ)

たとえ夫が浮気をして、露骨に仲違いするものではない、それと

なく事を荒立てずに柔らかくあてこするのが、最も賢明な効果的な方法である。放任主義もよいようではあるが、夫に軽く見られるのでやめた方がよいというのである。現代においても、妻が夫に対する不服の意志表示の方法はこれ以外にはないだろう。中庸というところが、万事において最も肝要だと思ふ。

そして、

すべて、心に知らんことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは、すぐすべくなくむ、あべかりける。(同、七一ページ)

と言っているように、むやみに気取ったり、教養ぶったりしないので、万事控え目にするのが女性としては特に大切である。それに關して、『紫式部日記』に、

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち真字書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍れば、……。 (七三ページ)

と、清少納言について批評している。彼女は才学を誇っているかのようだが、実質はそれほどすばらしくもなく、また、そんな性格の持主の行く末はよくないと断言している。「子は三歩下がって、師の影を踏まず」とよくいわれるが、作者もやはりそういう謙虚さというものを大切にしている。そして、そうする生活態度から、女性幸福になれるのだと語っているのである。

## 五、まとめ

以上、述べてきた紫式部の女性観をまとめてみる。妻としての最低必要条件は、男性が「頼れる女性」であること。妻として理想的な性格は、「物まめやかに静かなる心の趣」のある女性であること。

結婚して幸福になるためには、万事控え目に謙虚に行動すること。

九八〇年前の紫式部のこの女性観は、二〇世紀の今日にもなお、そのまま生き続け、十分通用するものだと、わたくしは信じている。

## おわりに

紫式部は、学者で歌人であった藤原為時の娘で、藤原宣孝と結婚したが、二年ほどで夫と死別し、出家を考えたという。そのころから、『源氏物語』を書き始めたのである。

宮廷生活、地方生活という実生活の表裏を経験し、年の離れた夫との恵まれない結婚生活も経験した。あらゆる人生経験の中から生まれたのが、『源氏物語』であり、その総論とも言われるのが「雨夜の品定め」である。

彼女の女性観には、これが同性の考えかと思われるほどのきびしさがあった。むちをたたきつけるようなきついことばがあった。流麗な文章の中に潜む彼女の冷静な姿勢、そこに、女という甘えを取り除いたひとりの人間を見た。わたくしは、そういう彼女に一種の

恐れを抱くと同時に、彼女の偉大さを痛烈に感じたのである。

偉大なる紫式部の女性観を、わたくし如き未熟な者が論じようなどというのは、所詮無理なことだったのかもしれない。できあがったこの論文は、「質より量で勝負」というくぐらぬものになってしまった。だが、この論文には、二年間、大学で学んだもののおすべとはいかなけれど、なにかが表われているはずである。その意味でこの論文は、わたくしにとって大きな意義があると思う。

### 参考文献

- 『源氏物語』 (山岸徳平校注) 岩波書店  
『源氏物語』 (新潮日本古典集成)、石田稔二・清水好子校注 新潮社  
『源氏物語』 円地文子訳 新潮社  
『源氏物語』 守隨憲治 数研出版  
『紫式部日記』 池田亀鑑・秋山虔校注 岩波書店  
『紫式部日記』 (学燈文庫) 関根慶子 学燈社  
『人物日本の女性史』 1 円地文子監修 集英社  
『源氏物語講座』 山岸徳平・岡一男監修 有精堂  
『源氏物語女性像』 竹村義一 有精堂  
『源氏物語の文芸学』 仲田康幸 風間書房  
『源氏物語の構想と鑑賞』 重松信弘 風間書房  
『物語文学』 1 池田亀鑑 至文堂

### 〔評〕

「葎木」の巻におさめられた紫式部の女性論「兩夜の品定め」は、彼女自身の個性的な一面を語る自画像として興味深く、従ってその研究書も多く出版されている。尾崎さんは、入手した参考文献を踏まえて、研究上の視野を広めながら、あくまでも原文の熟読と考察を重視している。それは作者の肉声を聞きとろうとする誠実さと云えよう。

日次に明示された研究構成に従って、紫式部の評価する女性群の諸相を追究している。賛否批判の考察態度には、いかにも現代女性の若々しい生活感覚が一貫し、新鮮さが感じられた。総合的な見解として、紫式部の女性観を三点にまとめ、それは、時代、世相の変遷に関係なく現代にも十分に通用する日本女性の理想的な資質であると肯定している。

記述は、すなおで解りやすく、女らしい観察から生まれた説得力のある作品だと思う。  
(野崎アサエ)